教思想がある．

この思想が最も体系化されているのが，仏教の「『空』の思想」である．この「『空』の思想」は，具体的には縁起の構造という無数に関係し合う相補的存在を前提とする自・他者の関係性，つまり自他の区別さえ相対化される，あるいは超越される世界構造を前提とする思想である．しかもそれは，単に空間的な意味で共存を許すというような消極的他者ではなく，隣人として，あるいは同じ人間さらには諸存在（仏教で言えば一切衆生ということにあるが）と認識して他者（人間のみならずあらゆる存在）を自分と対等にみなすという思想を基礎とする．それは，結果として他者の存在の尊重，つまり非暴力思想に通じ，自己の相対化，自我の抑制であり，そこには必然的に忍耐や我慢というものが付随する．しかし，その時の忍耐や我慢は，「冷たい寛容」の場合とは，異なり常に，自らに引き当てて相手の行動を理解したうえでの「赦し」であり，「我慢」であるということになる．

なぜなら，今は耐える，あるいは耐えさせるほうであるが，その立場が逆になることもある，との認識が相互に生じるからである．そこには，「自分が正義である」というような思想も，ましてや聖戦というような発想は生じえない．故に，寛容思想は非暴力思想でもある．これが「自他同置」思想の基本構造である．そして，寛容の文明インド文明の基本構造である．

次に，この寛容思想の具体的な展開として，政治思想との関係も深い非暴力あるいは不殺生の思想について検討する．

V　インド的寛容思想の源泉

インド思想に於ける非暴力・不殺生主義（これを支えるのがインド的寛容思想である）の起源は，恐らくインダス文明にまでさかのぼることができよう．周知のようにインダス文明は，紀元前2500年を挟んで前後1000年ほどの間，インダス河流域を中心に繁栄した文明である．そしてその遺跡分布は，東はデリー付近，西はアラビア海沿岸のイラン国境付近，南はボンベイの北200km，北はシムラ丘陵南端に及ぶ広範囲に及ぶ文明であるが，しかしこの文明では，支配装置でありまた，暴力装置である軍隊がほとんど存在しなかったし，王の宮殿といえる建物も他の富裕層と大差の無い質素なものであった．

つまりこの遺跡からは，強大な権力集中を髣髴とさせる絶対君主の存在，その権威を示す王城や王宮，そして強大な軍隊の存在を思わせる武器の存在などが，殆ど見出せないのである．つまり，暴力や武力による支配が行われていなかった，といわれるのである．

勿論，それはこの文明が統一性を持っていなかった，ということを意味しない．それど

ころか，この広範囲の遺跡から出土する錘の規格，つまり度量衡は，例えば最小が 0.857 グラム，そしてその偶数倍と全て規格統一されている．また，都市も都市計画によって整備され，そこで用いられたレンガは　焼きレンガであり，しかも規格統一されていた．

では，一体この高度に発達した都市型文明を，武力を用いずに統治した存在は何であったか？　残念ながら現在のところ不明である．ただ，モヘンジョ・ダロから出土した通称神官王の像が，我々にヒントを与えてくれる．しかし，インダス文字が解読されておらずその全貌は未だ不明である．

加えてインダス文明の発掘品の多くは，メソポタミア等との交易品であった紅玉髄（メノウなどを加工して首飾りにしたもの，高度な加工技術が要求された）やチェスや子どもの玩具などであり，遺品や発掘調査からでは，この文明に関しての体系性などは，殆ど不明なままである．

しかし，我々はこの文明から，大きな可能性を導き出すことが可能である．つまり，他の 3 大文明，つまりエジプト，メソポタミア，そして中国と強大な武力をもって領土を支配し，またその富や権力が王やその周辺の限られた人々に集中した文明形態とは全く異なる，文字通り平和で平等な文明，しかも現代の都市計画から見ても驚くほどの計画都市を築き上げたインダス文明の有り方は，暴力や強権的専制体制ではない，人間の文明が可能であることを我々に教えてくれる．

まさに，インダス文明の中に 21 世紀の国際社会が直面する武力や暴力の応酬による力の支配とは，異なる文明の有り方の先例がある，ということができる．しかし，残念ながらインダス文明は，直接インド文明に受け継がれることが無かった．それは，遊牧民であり，武力に秀でたアーリア人の侵入，支配，定着という悲劇がインダス文明を襲ったからである．時に，紀元前 15−13 世紀頃といわれている．

以来インダス文明は，歴史の表舞台から姿を消していった．しかし，その伝統は非征服民の中に受け継がれた．そして，このインダス文明的な平和思考，非暴力思想は，インド人の精神世界に明確に現れてくる．それが有名なウパニシャッド時代，紀元前 8 世紀以後数世紀におよぶ自由思想の時代である [6)]．

特に，ガンジス河流域の生産性が向上し，多くの都市国家が生まれた紀元前 6 世紀以降のインド思想の中には，征服民であるアーリア人的な文化とは明らかに異なる思想が顕在化する．そして，その象徴的な存在として仏教の開祖ゴータマ・ブッダがいる．

以下において，ゴータマ・ブッダの思想の検討を通じてインド的，就中仏教的な寛容思想の検討を行う．勿論，その目的はこの寛容思想をより良い社会構築の為に如何に役立たせるか，という目的を踏まえての検討である．

Ⅵ　ゴータマ・ブッダに於ける非暴力と融和思想

ゴータマ・ブッダは都市国家群が，群雄割拠する紀元前6あるいは5世紀のガンジス河中流域の釈迦族国王スドーダナとその妃マヤーの長子として生まれた．つまり，彼は実質的な皇太子として成長した．しかし，戦乱が絶えず，社会不安が渦巻く現実社会に絶望する形で，彼は宮廷生活を捨てる．

ゴータマ・ブッダの出家は，一般に生老病死という人間が持つ根源的苦悩の解決のためとされる．しかし，それだけであろうか？　ゴータマ・ブッダの出家は，そのような個人的な問題だけであったのか？　少なくとも，彼の出家の動機や修行のエネルギーそして，宗教活動が，そのような個人レヴェルに矮小化されていいのであろうか？

勿論，ゴータマ・ブッダの理想は，個々人の救済にあったことは否定できないが，しかし，同時に個人の救済は，その前提として個人の所属する社会の救済（平和的状態）が不可欠であることは，論をまたない．だからこそ，ゴータマ・ブッダは，他者との関係性の破壊行為である暴力に対して強い調子でこれを戒めたのではないか．

というのも，ゴータマ・ブッダは，

> すべての者は暴力におびえ，すべての者は死をおそれる．己が身にひきくらべて，殺してはならぬ．殺さしめてもならぬ[7]．

> 他人を苦しめることによって自分の快楽を求めるひととは怨みの絆にまつわられて，恨みから免れることができない[8]．

との基本認識をもち，その源には，

> （世の人々は）めいめいの見解に固執して，互いに異なった執見をいだいて争い，（自ら真理への）熟達者であると称して，さまざまに論じる．…「論敵は愚者であって，真理に達した人ではない」と言う．これらの人々はみな「自分こそ真理に達した人である」と語っているが，これらのうちで，どの説が真実であろうか？

> もしも論敵の教えを承認しない人が愚者であって，低級な者であり，智慧の劣ったものであるならば，これらの人々はすべて（各自の）偏見を固執しているのであるから，彼等はすべて愚者であり，ごく智慧の劣った者であると言うことになる[9]．

という認識があるからである．

このようなゴータマ・ブッダの思想の背景には，自己を絶対視して，他者を貶める慢心や我執への鋭い批判がある．

つまり「一方的に決定した立場に立ってみずから考え量りつつ，さらに彼は世の中で論争をなすに至る．一切の断定を捨てたならば，人は世の中で確執を起すことがない」[10] と教える．

では，どうすればいいのか？

ゴータマ・ブッダは「慈しみ（mitta）と平静とあわれみ（karuna）と解脱と喜びとを時に応じて修め，世間すべてに背くことなく，犀の角のように歩め」[11] と教える．

しかも，この境地に達するためには「憎しみを持って憎しみに報ずれば，憎しみは絶えることがない.」とする．この思想こそは，ゴータマ・ブッダの教えの真髄であり，インド思想の到達した寛容思想ということができよう．

ゴータマ・ブッダの教えは，人間の本質を深く洞察するものであったが，しかし，彼によって作られた仏教教団は，出家者の集団への教えが中心となっていたこともあり，社会への影響ということでは，ゴータマ・ブッダの精神的後継者で，偉大な為政者であったアショーカ王の出現をまたねばならなかった．そして，このアショーカ王の思想や政策にこそ，インド文明に特徴的な非戦と自己犠牲を基礎とする寛容思想が見いだせる．

Ⅶ　アショーカ王と始皇帝の対照

アショーカ王は紀元前ほぼ 268 年から 232 年の間，インドを統治したマウリヤ朝の第 3 代の王である．彼の詳しい伝説については，ここで触れる紙幅の余裕はないが，彼の存在は仏教圏においては護教の聖王として知られている．しかし，仏教を信奉したアショーカ王は，世界各地に見いだせるような自宗教の狂信的な信者ではなかった．つまりアショーカ王は仏教のみを許し，他を弾圧するような偏狭な宗教政策をとらなかったのである．このアショーカ王のインド的文明的な寛容思想の基づく政策の特徴は，ほぼ同時代において中国（黄河）型の典型であり，後の中国社会の基礎を築いたともいえる秦の始皇帝（在位 221−210）との比較によって一層明確となる．今回は，紙幅の都合でこの件に関しては，簡単な比較に留まるが，両者の思想，政策は対照的である．

しかし，両者の初期の行動や思想は似通っていた．つまり，アショーカ王自身も自らの兄弟を殺め，王位に就くやインド亜大陸全土の征服という政治的・軍事的野望に燃えて，軍事的行為，つまり武力行為に及んだ．

しかし，その統一を成し遂げた後，彼は仏教を受け入れ，仏教の精神によって国を統治

する，つまり法（dharma）による統治へと大きく思想信条をはじめ政策を転換した．

「この大地を征服するであろうが，刑罰によらず，武器に拠らず，法（仏教のことで，始皇帝のような厳罰主義の法ではない）によって統治する」[12] ことを実践した．

アショーカ王の「民を理（おさ）むるに慈を以ってす．己を（みなすごとくに）恕（おもいや）りて彼を度す．」とか，「君が貧徳ならば民が窮（くるし）む．君が富徳ならば民家は足る．」[13] というような言葉に，その真意が読み取れる．

そして，仏教の理想を現実の社会に生かそうとしたアショーカ王は，現実の生活もまた仏教の理想を貫いた．自らを「温容ある者」と自称したアショーカ王は，熱烈な仏教信奉者であったが，同時にジャイナ教・バラモン教・アージーヴァイカ教など他の宗教も保護した[14]．その思想は，「一切の宗派の者があらゆるところにおいて住することを願う．」（磨崖勅令第7章）に明らかである．

では，その理想とは何か．それは一言でいえば，自己犠牲（利他心）と非戦，そして寛容の政治，仏教的にいえば慈悲の政治ということである．それを実践するためのものが，アショーカ王が「法（dharma」）」と呼ぶものである．この法は，人間の有るべき姿，理想としての規範を意味するものであり，それ故に全ての人々によって実践されるべき徳目を含んでいるとされる．

つまり，先に触れたようにアショーカ王は，自らの悲惨な戦争体験から，仏教に深く帰依し戦いのない平和な国家を建設すべく（仏）法に基づく統治を目指したのである．

アショーカ王は「神々に愛される王は，一切の生きとし生けるものに対して，傷害をなさず，克己あり，心が平静で，柔和であることを願う」（同第13章）のであり，これは王のみならず全ての人々に奨励された．

彼は仏教の教えによる，つまり不殺生と利他行（自己犠牲）を中心とする寛容の教えである仏教の法による理想国家の建設を目指し不断の努力を惜しまなかったのである．しかも，この法は王の率先垂範のもと「身分の低いものでも，身分の高貴な者であっても，ともに励してつとめるように（小岩石詔勅1）」とされた．しかもその法の中心思想には，不傷害・不殺生，そして寛容の思想があった．アショーカ王はいう「生類を屠殺しないことは善である」（磨崖勅令第3章）と．しかも彼の命令は，単に生類の殺害を禁止したのみならず，

> （神々に愛された温容ある）王の領土のうちではいたるところに，…中略．二種の療病院が建てられた．すなわち，人々のための療病院と家畜のための療病院とである．そして，人に効があり，獣に効があるいかなる薬草でもすべて，それの存在しない地方へはどこであろうとも，そこへそれらを輸送し栽培させた．…また道の傍らには井

戸を掘らせ，樹木を植えさせた．…それは家畜や人々が受用するためである．（同第2章）

というように，それぞれの生命を貴び最大限の努力をも行ったのである．

それは前出の「一切の生きとし生けるものに対して，傷害をなさず，克己あり，心が平静で柔和であることを願うからである．」（同第13章）という彼の仏教的思想に基づく信念に発しているのである．

彼はこれらの信念を具体化したものを「法」と呼び，この「法を実践することを自らの使命としたのである．」（同第2章）

彼の教えは，インドのみならず西側諸国・スリランカにも伝えられやがて中国や日本まで及んだ．

この不傷害・不殺生の思想は，やがてインドの他の宗教にも受け継がれ，今日に至っている．後述するように，この精神は，後のインド思想はもとより，インド政治思想にも継承され，18世紀のムガル皇帝アクバルや20世紀の指導者の一人，マハトマ・ガンディーにおいていかんなく発揮された．

一方，アショーカ王とほぼ同時代に，中国の統一という同様な偉業を達成した始皇帝と比較すると，一層特徴的である．両者は，まさにインド文明と中国文明の象徴的なモデルであると思われる．中国文明も基本的には，アニミズム的な多神教的文明であるが，現実社会では合理主義的な側面を強く持っていた．

始皇帝は思想統一としての焚書坑儒を行い，皇帝絶対の中央集権制度を敷き，逆らうものをことごとく武力で鎮圧，排除していった．現在知られている始皇帝には，民への配慮や慈悲，寛容と呼べるような政策を執ったことを知らせる史料は無い．多くは厳罰主義で「上，刑殺を以って威を為すを楽しむ」[15] といわれるように，その民衆支配は厳罰主義であり，またその富は，絶対君主である始皇帝を中心とする一部の為政者に集中した．また，強力な軍事力は常に敵を求め，中国奥地にまで紛争は展開し，広大な長城の建設という大事業は，民衆を塗炭の苦しみに駆り立て，幾十・百万もの人間が，彼および彼の帝国の建設と維持のために殺された．

そして，これらの集大成が始皇帝の墳墓である．彼は絶大な武力によって民衆を支配したが，晩年は死の影に怯え神仙術に耽溺し，道士に翻弄され，その一生を閉じた．そして，広大な墳墓を作るために多くの人々を駆り立て，また巨大な富を我がものとして地下深く死蔵する．インドと中国の王権の差であり，その背後には思想伝統の差が存在する．つまり始皇帝の生き方は，民衆の王として「愛情をこめてみるもの」「顔容親しみやすいもの」と自らの称号に用いたアショーカ王とはまさに正反対の思想が存在しているといえ

る．

このようなアショーカ王の精神は，実に彼一人のものではなく，後にインドを巡礼した玄奘三蔵が知遇を得たカニシカ王にもその特徴が見いだせる．そして，それは後のイスラーム教徒の偉大なる皇帝アクバルにも通じるものとなる．

Ⅷ　インド・イスラーム的の寛容思想の形成

仏教やヒンドゥー教のようなインド思想・文明の直接の後継者が，いわば寛容の精神を文明の中核として受け継ぎ，育んだということはある種の必然である，ということができる．しかし，それは外来のイスラーム教徒にも引き継がれたというところに，寛容と非戦・非暴力が，インド文明に通底するものであることを知ることができる．

イスラームは本来多神教（カーフィル）を同等には認めない宗教であるが，しかし，インドでは全く異なったイスラームの姿が生まれ，また展開した．特に，インド・イスラームの特徴ともいうべき，寛容思想を具体的に展開したのは，いわゆるスーフィーたちである．そして，インド・スーフィーの寛容思想という思想的な傾向を決定付けた思想家とされるのが，ファリド＝ウッディーン（Farid 'Ud-dīn:1176−1265）である．

彼の思想には，イスラーム的であると同時にヴェーダンタ的な思想，絶対的存在である一者との合一，つまり神人合一と，それを基礎とする現象界における差異の超克の思想が見いだせる．

ファリドはいう，

> 正しいことを言い，正しいことを行いなさい．
> 人は永遠の命を持つことはできないのだから（人は必ず死後に神の審判を受けねばならない．）その時には，6ヶ月かけて出来た身体も，一瞬にして無となる．（中略）
> あるものは荼毘に付され（ヒンドゥー教徒のこと），あるものは墓の中に行く（イスラーム教徒のこと）．しかし，彼らの魂は生前の行いによって裁きを受ける[16]．

このようにファリドは，正統派のイスラーム教徒でありながら，イスラーム神学に於いて忌避される，多神教であるヒンドゥー教に対して，イスラームとの価値的なレヴェルでの同質性を象徴的に主張した．ファリドには，イスラームとヒンドゥー教との形態的な差異を超えて，本質的な一致を前提とする思想の萌芽，少なくともその可能性が現れている．つまり，ファリドの主張には，神への絶対的帰依，あるいは神人合一の立場に立てば，宗教の差異は問題にならないという，インド的にいえばヴェーダンタ思想，そしてイ

スラーム的にいえばスーフィズムの思想が展開されている．この思想は，多数のインド・イスラームに受け入れられ，一つの伝統となっている．

この伝統を継ぐものが，15−16 世紀に活躍したカビール（1425−1492 頃）とナーナク（1469−1538）等であり，さらにこれを深め，そして具体的な政治に反映させたのがアクバル帝であり，そのひ孫のダーラー・シコーであった．

Ⅸ　アクバルの融合思想とその政策

カビールやナーナクから遅れること数十年にして，ムガル帝国第 3 代の皇帝アクバルは，独自のヒンドゥー・イスラーム融和思想，それをさらに進めた融合思想を展開した．またアクバルは，この視点を，単なる抽象論に終わらせることなく，現実の政治・社会政策に展開し，既存の諸宗教をイスラームと同等視した寛容政策を展開した．

先にも検討したようにインド文明には，諸宗教の共存を可能にする思想の伝統が，その底流に存在し，その伝統はイスラーム教徒の世界においても，無理なく受け入れられた．この点で象徴的な存在がムガル帝国第 3 代皇帝のアクバル（1542−1605）である．

彼は，自らもスーフィーとして宗教的な体験を持っており，またその宗教思潮を積極的に宗教的にも，また政治的，文化的にも展開した．

その結果，ヒンドゥー・イスラーム融合文明といいえるような諸宗教・文化融合が，アクバルからダーラーまでの約百年間，インド・イスラーム世界にイスラーム文明を中心として花開いた．そこでは，各宗教が，同等に扱われ融和・融合する宮廷文化が花開いた．

アクバル帝は 1579 年イスラーム至上主義者への反省を込めて，諸宗教融和を旗印としたディーニ＝イラーヒー（Dīn Ilāhī：神聖宗教）を始めた．これは 1575 年以来続いていた信仰の家（Iba'datkha'na: 信仰の家）における諸宗教の対論を通じてのアクバル帝がたどり着いた結論であった．

ところで，アクバルは最初から諸宗教の融和・融合を考えていたのではない．彼も初期においては正統派のイスラーム教徒であった．しかし，やがてスーフィズムの思想に傾倒し，イスラーム至上主義から諸宗教の融和，そして融合思想を展開するに至った[17]．

アクバルはこの「信仰の家」においては，「この神聖なる場所は，霊性の構築のために供され，この地に神聖なる智の柱が高々と出現した．」[18] と表現され，この場には，スーフィーとしてのアクバル帝を中心に

彼の寛容さと神の影を明らめる（帝の）寛容さによって，ここにはスーフィー，哲学